

Title	源氏物語肖柏本：その書誌的概要と考察
Sub Title	Genji-Monogatari, the Shōhaku text : a study of bibliographical outline
Author	岡嘉, 偉久子(Okajima, Ikuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.113, No.1 (2017. 12) ,p.16- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	田坂憲二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01130001-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

源氏物語肖柏本

—その書誌的概要と考察—

岡寫 偉久子

はじめに

肖柏本は室町期成立の、五十四卷揃い一筆書きの源氏物語写本である。桃園文庫・紅梅文庫旧蔵。現在は天理図書館所蔵となつている。いわゆる青表紙本中の重要写本の一つとして、『源氏物語大成』校異篇^①に五十四卷中の五十卷が採録されている。『大成』の「校異ニ採録シタ諸本」中の「青表紙本」の項には

肖 肖柏本 牡丹花肖柏筆 桃園文庫蔵

とある。しかし、『大成』の「現存重要諸本の解説」の項に記載はなく、『源氏物語事典』中の大津有一「諸本解題」^②に「天理図書館蔵伝牡丹花肖柏筆源氏物語」とある七行ほどの記述が、ほぼ唯一の書誌的解説のようである。

本稿では肖柏本調査の第一段階として、その書誌的概要と、そこから推測される本書成立の周辺・輪郭について、また、各巻に付された池田亀鑑氏筆の付箋——そこには各巻の本文についての見解が簡略に記されている——を紹介しておきたい。

源氏物語肖柏本の書誌的概要

形態的事項

巻冊数 五十四卷五十四冊

装訂 綴葉装（列帖装とも）

綴葉装は、料紙複数枚を重ねて中央から二つに折り、それを一折（括り）として、数折を重ねて各折り目に綴じ穴をあけて糸で綴じ合わせる。従って二折以上でなければ装訂として成り立たない。本書は、五十四巻各巻が多くは二〜三折から成っており、若菜上・下また総角や宿木巻のように特に長い巻々でも五、六折までである。従って、長い巻々は当然に一折の紙数が十また十一紙と多くなり、反対に篝火などのごく短い巻は一折が二紙から成っている。綴葉装の形をとる源氏物語写本では、長い巻では十折を越える例も多く、本書のように折数を抑えて一折の紙数の多寡で分量の調整を行っているのは比較的珍しい料紙の構成である。

また、本書の内三十九冊ほどは、本文が終わって後の白丁（遊紙）が見事に一丁である。後は、白丁なしが一冊、二丁が十一冊、三丁が三冊。綴葉装では複数枚の紙を重ねて折って一折として、そこに書写を行っていくので、最終折の初めや途中で本文が終わることも多く、その場合、白丁（遊紙）が多量に五丁も六丁も、時には七、八丁も残されていることがよく見かける。巻末の白丁がせいぜい二、三丁までに揃っている場合は、白丁の内の数丁が切り取られていることが多い。しかし、本書には切り取り白丁は一丁もない。料紙に無駄の出ないように、前もって周到に各巻墨付丁数の予測、料紙の計算がなされていることがわかる（付「各巻別書誌一覧」参照）。

大きさ 四半本（概ね、縦二四・〇、横一八・五センチ）

四半本としては特に横幅が大きい。精一杯の幅である。本書の料紙は上質な鳥の子紙であるが、当時、高価であった鳥の子紙を使用するにあたって、四周の断ち切り分を極少にして全紙一枚から精一杯の寸法を採っている。そのために、通常

は切り落とされる、紙漉き時の一紙四周の繊維の縫れ・溜まりよがそのまま残存している箇所が見受けられる（柏木・東屋・浮舟・蜻蛉巻等には特に多い）。

表紙・見返し

表紙は五色（浅緑・淡黄・薄紅・深緑・紫）の色変わり絹表紙。見返しは布目紙に金揉箔散らし。

現在の表紙は、桐壺巻は浅緑色、帚木巻は淡黄色：のように、五色の絹が巻毎に右記の順序で繰り返されている。これは元々の原表紙ではなく、江戸中期頃の改装後補表紙かと思われる。

後に述べるが、本書の本文行間には様々な注記や書入が施されている。これらの行間書入は、時に本文下方の余白に及んでいるが、その書入の末尾が断ち切られてしまっている箇所が各巻に散見している。これは、本書が書写・制作された後、本文を読解しながらの注記書入が行われ、その後再度、料紙の断ち切りがあったということである。また、全冊の見返し紙に使われている金揉箔散らしの装飾紙は新しく、江戸中期頃のものと思われる。更に、本書は絹表紙と見返し紙との間に補強のための反故紙が入っている。中で、花宴巻の後表紙は後見返しとの間が一部剥がれており、その補強紙を見ることのできるのだが、その補強に使われた反故紙には「安永五年」の日付があり、おそらくはこの安永五年以降まもなくの改装であろうと思われる。この改装時の裁ち切りは天地のみのもので、現在の本書の天地裁断面はよく揃っているが、小口は比較的揃いで、「装訂」の項に述べたように原紙四周の繊維の縫れ・溜まりよを残している箇所もそのままである。

料紙 鳥の子紙

本書の料紙はよく揃った上質の鳥の子紙。「装訂」の項に述べたように、その料紙が無駄なく最大限に使用されている。

外題 題簽（縦一五・〇、横三・〇センチ）

絹表紙の中央上方には朱紙題簽が貼付されている。この朱紙題簽には天より一〇ミリ下げに金泥の横線が一本引かれ、その下に、各巻名が主としては仮名書きで墨書されている。全五十四冊一筆。この題簽も、その紙質や巻名の筆致から、表

紙・見返しと同じく改装後補時のものと思われる。

尚、問題簽には三冊に貼り誤りがある。濔標巻の冊に「梅かえ」、行幸巻に「みをつくし」、梅枝巻に「みゆき」の題簽が貼付されている（付「各巻別書誌一覧」参照）。

内題

本書には内題はない（帚木巻の前遊紙裏丁に「は、き木」、空蟬巻の前遊紙裏丁に「うつせみ」と墨書した小紙片が貼付されているが、近代のものであろう）。

紙票・付箋（池田亀鑑等筆）・印記

紙票 桐壺巻表紙には、池田亀鑑氏の文庫である桃園文庫の紙票が添付されている。

付箋 各冊の前遊紙表丁の右肩には付箋（小紙片）が貼付されており、そこには、当該巻の本文についての注記が簡略に記されている。大部分は池田亀鑑氏の筆。同記事は後の「肖柏本各巻本文についての、池田亀鑑氏の判断」に一覧する。

印記「紅梅文庫」（帚木巻の前遊紙表丁） 池田亀鑑氏の源氏物語写本蒐集に助力された前田善子³氏の文庫印

書写的事項

每半葉行数 全巻十行

字高及び一行字数

字高はほぼ二二・〇センチ前後。本書の縦寸法約二四・〇センチに対しては一杯に書かれており、天地の余白はわずかである。

一行字数は概ね二十〜二十二字前後。五十四巻全巻を通じて文字の大きさはよく揃っており、ほとんどむらがない。

和歌書写形式

改行して二〜三字下げで書き始め、成り行きで次行は行頭から和歌の続きを記し、和歌末には地の文を続ける。五十四巻

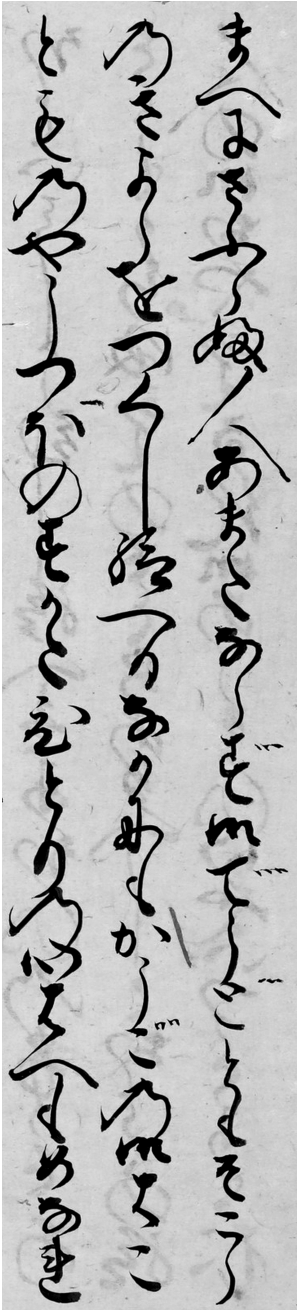
共に同一の形式である。ただし、胡蝶卷三才にある四首連続の和歌のみは、和歌第二行目も行頭から二〜三字下げで記されている。

書写者について

本書は五十四卷全冊が一筆。従来、牡丹花肖柏筆と伝来されている。本書が肖柏筆であるか否かについては後に取り扱う。種々の書入注記・濁点・句読朱点・朱合点・貼付紙箋等について（付「各巻別書誌一覧」参照）

書入注記 卷によってその多寡は異なるが、全巻の行間には種々の注記が書き入れられている。その内容は種々雑多で、主語の補記、簡略な語釈、また「明石ノ上懐妊ノコト也」「双帚ノ詞也」「タレトモナシ」といった解釈の補い、本文「この殿」「さくら人」等の傍らに「うたひもの」との注記等々である。これらの書入注記はほぼすべて本文同筆と認められる（口絵図版参照）。他に、音読のための注記であろうか、「ン」等の書込が桐壺卷以下のほぼ全巻にある。「まかて」「なかめる」といった類いである。

濁点 全巻に、濁って読むべき文字に対して濁点が付されている。大部分は一見、四点とも見える濁点で、仮名書文献には珍しい。中にごく少数ではあるが三点、二点のものも交じっている。中世以前の様相であろう（図版①参照）。



図版①「肖柏本」梅枝卷2ウ1〜3行

句読朱点 桐壺から賢木までの十巻と常夏巻、そして野分から竹河までの十七巻、計二十八巻に句読朱点が打たれている。該当箇所すべてにというわけではなく、巻によっても、また同一巻内でも、箇所によってその数にはむらがある。すべて字間中央に打たれており、内容はほぼ句点で、読点は極めて少ない。

朱合点 桐壺から賢木までの十巻と、常夏から竹河までの十九巻、計二十九巻に朱合点がある。ほぼ、前項の「句読朱点」のある巻と重なる。内容は引歌を示すものが多いが、巻によっては「二月十餘日」「平調」「采女」「内宴」（以上、紅葉賀巻より）等、種々の語句に朱合点が付されている。

貼付紙箋（本文同筆） 本書の十六巻ほど（若紫・末摘花・花宴・葵・玉鬘・初音・胡蝶・螢・常夏・若菜上・若菜下・横笛・鈴虫・匂宮・紅梅・手習）には、引歌等を墨書した紙箋が本文書写面上に貼付されている。これは本文同筆と認められる。各巻ほぼ一、二枚で、最も多い末摘花巻のみは四箇所である。これら紙箋の箇所と数からは、定家筆本や明融本等に見られる、奥人との関連が指摘されている貼付紙箋との関連は認めがたい。ただし「貼付された本文同筆の紙箋」という形態には、その影響が認められるのかもしれない。

付属文書等

本書には、古筆了意の極書一通と、その写し一通が付されている。

古筆了意極書 厚手緒紙（縦四〇・七、横五六・〇センチの一紙を上下二つ折り。上段に極書を墨書）

「源氏物語 全部

外題曼殊院良恕親王

牡丹花肖柏真蹟

無疑者也

天明六年 古筆
初春上旬 了意（黒印「琴山」）

本極書の包紙上書は、極書と同筆で「源氏物語折昏」とある。牡丹花一筆

古筆了意極書の写し 薄様（縦四三・五、横五八・〇センチの一紙を上下に折り、懐紙折にして使用）

上段に右の「古筆了意極書」を籠字で墨書。

下段に右の「包紙上書」を墨書。続いて「物唐桑箱覃笥」として、引き出しが十個からなる、おそらくは本肖柏本源氏物語の収納箱の図がある。その後「書状ニ而者委敷申上兼候間折紙／写箱之様子申上候表し之絹者／五色表しニ御座候」とある。

現在では、この「物唐桑箱覃笥」は伝わっていない。

東京大学「源氏物語に関する展覧会」時の本書キャプション

短冊状の厚紙に「六三 傳牡丹花肖柏筆本」と墨書。これは、昭和七年十一月に東京大学で行われた「源氏物語に関する展覧会」時の本書のキャプションであろう。この時に作成された『源氏物語に関する展覧書目録』⁵⁾中の本書の記事「六三 傳牡丹花肖柏筆本（室町時代）寫」と通番・書名共に一致する。

肖柏本の書写者について

牡丹花肖柏筆か否か

本書は一筆の源氏物語で、牡丹花肖柏筆あるいは伝牡丹花肖柏筆として伝来してきたものである。（傍線は稿者、以下同）

書写者の判断についてのこれまでの概略は、まず、先に述べた付属文書では

1. 古筆了意極書「牡丹花肖柏真蹟」 天明六年（一七八六）
2. 東京大学での展覧会時キャプション「傳牡丹花肖柏筆本」 昭和七年（一九三二）

となっている。2は池田亀鑑『校異源氏物語』⁶につながる源氏物語蒐集伝本の展覧会であり、この時の池田氏の判断は「傳」牡丹花肖柏筆本」ということになる。

しかし、その後『源氏物語大成』では

3. 「肖 肖柏本 牡丹花肖柏筆 桃園文庫蔵」 昭和三十一年（一九五六）

と「傳」がとれている。肖柏本は五十四卷中五十卷が『大成』に収録されているが、「研究篇」第三部「現存重要諸本の解説」には記述がなく、3の記事は「校異篇」凡例の「校異ニ採擇シタ諸本」中の一行である。

続いて『源氏物語事典』中の大津有一「諸本解題」には

4. 「天理図書館蔵伝牡丹花肖柏筆源氏物語」 昭和三十五年（一九六〇）

との見出しで、同解説文中「筆者」の項には「不詳。古筆了意の折紙によれば、牡丹花肖柏の真蹟という。室町中期の写」とある。

現在の所蔵者である天理図書館の『稀書目録和漢書之部第三』⁷には

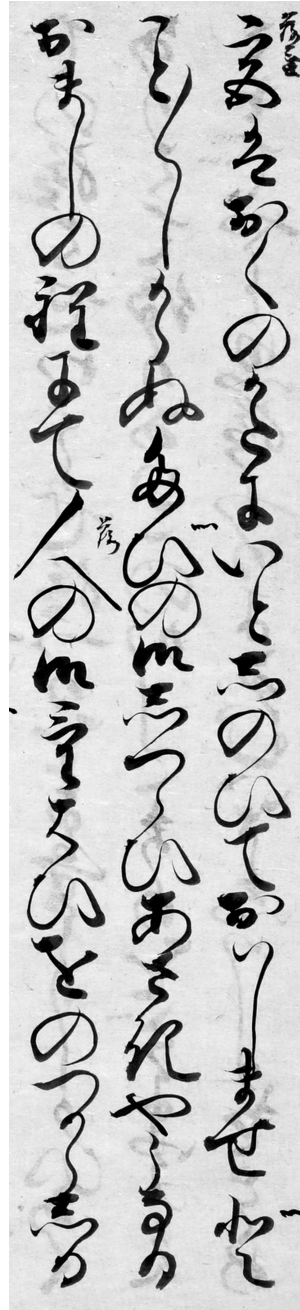
5. 「傳」牡丹花肖柏筆」 昭和三十五年（一九六〇）

とあり、同注記には「室町時代末期寫」とある。肖柏は嘉吉三―大永七年（一四四三―一五二七）を生きた人であるから、『天理図書館稀書目録』のように室町末期書写との判断であれば、おそらくは肖柏ではない、ということになるだろう。

以上がこれまでの、本書の書写者に対する主な記事である。

本書自体には奥書及び識語の類いが一切なく、署名・花押等もない。蔵書印も近代の「紅梅文庫」印のみである。また付属文書にも極書以外には書写者や所蔵者等を推測させるものはない。すると成立年代については、本書において後補と思われる表紙・見返し等を除いて、本文料紙の紙質や本文筆跡等から判断するほかはなく、また、書写者については筆跡が主な手がかりとなる。ただし、肖柏の真筆と認定されたものでまじったものはほとんどない。伝わっているものは、主には消息、和歌懐紙や短冊の類で、その資料の性質上、いずれも「夢」「肖柏」「牡丹花」等の署名があり、肖柏筆であることがわ

かりやすい。⁸⁾これらと、長大な散文の写しである本書の筆跡とを比較するのは難しいのだが、この範囲における比較の結果は、よく似た筆跡ではあるが本書を肖柏筆とは認定できない、という判断となった。例えば、本書の仮名中、字母が「比」である仮名「ひ」には顕著な特徴があり、「ひ」の右端の部分が曲線を交えて長く引かれている(図版②参照)。



図版② 「肖柏本」夕霧卷4ウ4～6行

この「ひ」は五十四巻を通じてすべて共通しており、本書書写者の書き癖の一つと認められるが、肖柏筆と認定されている他の資料には一字も見当たらない。「ひ」の場合ほどには顕著ではないが、他にも書き癖の相違が認められ、本書を肖柏筆とは認め難い。

三条西家本(日大本) 花宴卷末記事中「肖柏筆」をめぐって

本書が現在「肖柏本」と通称されているのは、前記の古筆了意極書や『大成』以来の伝承筆者名に因んでの名称である。しかし、以前に遡っては、肖柏と『源氏物語』写本にかかわる記事として著名なものに、『実隆公記』中の「夢庵(肖柏)所持之古本」⁹⁾という記事、また、三条西家本(日大本)以下「日大本」と略称)源氏物語花宴卷の次のような本奥書があり、見ておきたい。

享祿三年正月十九日書寫之了

奥入以別昏写之二月廿八日一校了

桑門堯空七十六歳 (17ウ)

この「本肖柏筆」については、その意味が不明ともされてきたが、そのままに読めば岸上慎二氏の説¹⁰となろう。「本肖柏筆」は「以京極黃門定家卿自筆校合畢」の一行にかかる注記であり、「桑門堯空(実隆)」が、親本にある肖柏筆の校合奥書一行「以京極黃門」をそのまま転記し、この一行は肖柏筆で書かれていると注記しているものである。従って、この本奥書の「肖柏筆」は、肖柏筆『源氏物語』写本に直接につながる情報ではない。尚、この、実隆が親本とした肖柏筆校合奥書を持つ本が、すなわち『実隆公記』中の「夢庵(肖柏)所持之古本」であることは岸上慎二氏によってすでに指摘¹¹がある。ただし、その本文は、所持していた古本に定家自筆本を以て肖柏自身が校合を加えたものとして、肖柏にとっては自身の本文——肖柏本であったことだろう。この、肖柏所持の古本を親本として成立した日本花宴卷本文と、肖柏筆として伝来してきた本書の花宴卷本文について、比較をしておきたい。

以下に、両本の花宴卷本文について、漢字・仮名表記、仮名遣い、「ん」と「む」、音便形、以上の相違を除外しての対校結果について主な点をあげる。

1. 両本の本行本文の異同は三十箇所ほど。その規模は、各箇所共にほぼ一〜数文字までの範囲である(全箇所の例示は省略する)。

2. 1の本行本文の相違箇所は、日本本の本文修正(見せ消ち・補記等)によって、三十箇所中の二十三箇所が肖柏本と同じ本文となっている。同時に、この二十三箇所の修正はすべて、多くの定家本諸本、中でも池田本・明融本・大島本等と共通する本文への修正である。

3. 残る本行本文の異同七箇所には両本に修正が入っていない。また、同文であった本行本文に、日本の修正によって異文となった箇所が二箇所、肖柏本の修正によって異文となった箇所が二箇所。総計十一箇所が、両本の修正後の本文異同箇所である。

4. この十一箇所の、両本の本文異同を一覧する。

* 掲出本文は肖柏本。() 補記中の本文は日大本。棒線は相違箇所。尚、〔 〕内の数字は『大成』の頁・行数

- ① はつかしくはるく^レと(はつかしくてはるく^レと)〔二六九10〕
- ② すくしてかゝる事もや(すこしてかゝることもや)〔二七〇4〕
- ③ いかてかもりにけん(いかてかもりにけん)〔二七〇13〕
- ④ めしよせたりとも(めしよせたりとも)〔二七二1〕
- ⑤ また人の○ありさま御(又ひとのありさま)〔二七四4〕
- ⑥ あふきはさくらのみへかさね(あふきはさくらのみへかさね)〔二七四8〕
- ⑦ ならしたる草のはらを(ならしたり草のはらを)〔二七四9〕
- ⑧ いまはいとよくならはされて(いまはいとようならはされて)〔二七五3〕
- ⑨ 藤つほわたりをおほしいてらる(ふちつほわたりおほしいてらる)〔二七七11〕
- ⑩ わひにて侍る(わひにて侍り)〔二七七12〕
- ⑪ なにゆへとか(なにゆへかと)〔二七八10〕

〈異同箇所の内訳〉

- ①②④⑦⑨⑩⑪ 両本の本文が異なる(定家本諸本中、①②④は日本が単独本文、⑦⑩は肖柏本が単独本文、⑨⑪は肖柏本・陽名文庫本のみ少数本文)
- ③⑥ 両本の本文は同じ。日本の修正によって異文となる(修正の結果、日本は③⑥共に、定家本諸本中で

は明融本・池田本・大島本等と同文となる（⑥の「のみへ」は池田本には補記あり）

⑤⑧ 両本の本行本文は同じ。肖柏本の修正によって異文となる（修正の結果、肖柏本は⑤⑧共に、定家本諸本中では単独本文となる）

以上の対校結果に多少の補足を加えて、肖柏本と日大本の花宴巻本文について、次の点を指摘しておきたい。

・本行本文のみの対比では、両本の異同箇所は三十箇所に上り、両本の本文にはかなりの距離がある。異同箇所における日大本の本行本文は、河内本あるいは別本諸本中の一本に同文である場合が多く、むしろ定家本中の一本とすることがめらわれる様相である。

・日大本に施されている本文修正は、前述のように肖柏本と同文への修正二十三、肖柏本と異文への修正二、それに加えて仮名↓漢字（よ↓世）への修正一箇所の、計二十六箇所であるが、これらはすべて、定家本諸本の共通本文となる修正である。日大本は、定家自筆本を以て校合したという親本の校合奥書（肖柏筆）を尊重して、修正は修正としてそのままに写したものと思われる。

・日大本の本文修正の結果、両本はよく近似した本文となっている。しかし残る十一箇所の異同箇所の内容からは、日大本と肖柏本にはやはり直接の書承関係はないと判断される。

本書成立の周辺と書写者の輪郭

では本書が肖柏筆でないとして、書写者をどのように考えるのかという点について、本文書写の様相、注記の書入その他から推測されることを述べてみたい。

まず、本書は全巻の本文が一筆である。一人の人物によって五十四巻全巻が書写されており、しかもその書写は、一巻中においても五十四巻という大部な巻を通じてもむらがない。文字の大きさ、一行字数、比較的ゆつくりと運筆されたその筆

致共に実に一定している。これは書写、中でも源氏物語という長大な作品の書写によく慣れている人物であることを推測させる。

また、前後の白丁の在り方も、形態的事項の「装訂」の項に記したように、綴葉装の源氏物語においては異例と言ってよいほどに切り取りなしに白丁（特に卷末）枚数が一定しており、見事に揃っている。これは、各巻本文の全体量を的確に把握しての紙数の準備である。ここからは、源氏物語写本の各巻本文の分量を熟知していることがうかがわれる。

そして、本文の文字・筆致は牡丹花肖柏を彷彿とさせる連歌師流のものである。

また、本書全巻に施された種々の注記や書入、添付紙箋はほぼすべて本文と同筆である。このことは本書が、源氏物語を読み、解釈し、学ぶために、その当人が自ら書写した源氏物語写本である、ということであろう。

加えて、肖柏本の本文は、定家本諸本では三条西家本（日大本）・三条西家本（宮内庁書陵部本）の本文と比較的近いことが旧来から指摘¹²されている。

こうしたことから集約されてくることは、本書の書写者は、源氏物語の書写によく慣れた、自らも源氏を読み、学び、解釈し、加えて音読する必要——例えば源氏物語の講義など——があった者、おそらくは肖柏や実隆周辺にあって、同じような本文を享受している者である。こうした人物が、自ら使用するために自分で全巻を書写した、その源氏物語写本が本書である。

こうした条件を満たす人物としては、例えば肖柏の弟子宗椿などの人物が思われてくる。伊井春樹氏が紹介¹³されているが、肖柏によれば、宗椿は生涯に源氏物語を写すこと二十三回（『醒睡笑』卷¹⁴）とのことである。源氏ほどの長大な物語を二十三回、伊井氏は「その壮絶さはことばには尽くせないものがある」といわれているが、まさに「壮絶」なまでの源氏物語書写である。しかし、書誌的事項に記したが、本書の料紙は全巻よく揃った上質な鳥の子紙である。当時、極めて高価な鳥の子紙¹⁵で二二七二丁（肖柏本全巻の本文二一五一丁、前後の白丁一二二丁）の料紙を揃えている。実隆が晩年に家の証本として作成した三条西家本（日大本）も同じく鳥の子紙であるようだが、それと同クラスである。本書の種々の校勘書込等がほぼすべて本文同筆であるところから、書写者の自分用と判断されるが、貴紳からの依頼ではなく、自身のための源氏

写本としては、宗椿のような一介の連歌師のものと想定することはやはり難しいかとも思われる。それとも、生涯かけて源氏の書写を行った者が、自分のための源氏物語として、高価な鳥の子紙を無駄のないように精一杯に使用して作成したのだろうか。本書はそうしたことを思わせる写本である。

肖柏本各巻本文についての、池田亀鑑氏の判断

肖柏本は『源氏物語大成』に青表紙本として収録されて以来、本文についてはほぼ『大成』の評価で通行している。しかし本書肖柏本の前遊紙表丁には、多くは池田亀鑑氏筆で、本文に関する簡略なコメントの記された付箋がほぼ全巻（帚木・少女巻は添付跡のみ）に添付されており、それらを見ると、単純には、いわゆる青表紙本の一本であるとしてすませ難い巻があるように、本文系統の判断に苦慮のさまがうかがえる。本書本文調査の参考資料として、この付箋記事を一覧しておく。

尚、本付箋記事は、大部分が池田亀鑑氏の朱筆記事（数箇所、墨書や鉛筆書、黒ペン書も交るが、その場合には「墨書」などと注記）であるが、蓬生巻以降には時折、いくらか幅広の端正な黒ペン書で書かれた記事の付箋も交ってくる。この黒ペン書はすべて同筆で、同一人物によるものであるが、その中に一箇所「秀云」（横笛巻）とある。この「秀」の一字を持つ人物を池田亀鑑氏周辺、『源氏物語大成』作業周辺で探せば、斎藤秀雄（春名好重）氏の存在があるが、どうであろうか（左の一覧中、池田氏記事は「」で、黒ペン書記事は□で囲んで区別した）。

1 桐壺 「青表紙」

2 帚木 （なし）

3 空蟬 「青表紙」

（同巻の後見返しに付箋一枚（薄赤刷原稿用紙の端を使用）

「二條西本ハ肖柏本ヲ底本トシ、池田本ニヨリテ校合セルガ如ク思ハル。」（黒ペン書）

4 夕顔 「青表紙」

5 若紫 「青表紙」
露水 露本

6 末摘花 万水 露ニ近し

7 紅葉賀 「青表紙」
マレニ河内本ノ所アリ

8 花宴 「青」 万水 露本ニ近ケレトマレニ河内本ニ類ス

9 葵 「青」 河内本ノ要素モアリ

10 賢木 「青」

11 花散里 「河内本 少異アリ」

本帖の本文は、大体に於て湖月抄の本文に一致して居ります。

(右付箋の余白に鉛筆書で)「大体 河内本なり」

12 須磨 「青」

13 明石 「青表紙ノ異本カ 異ナレル本文也」

14 湊標 「青河イヅレニテモナシ他ノ一本也」

15 蓬生 「河内本ノ一本也」

本帖の本文は、大体に於て、湖月抄の本文に一致して居ります。

16 関屋 「青 少異アリ」

17 絵合 「青 少異有」

18 松風 「青 青表紙ナレト河内本ノ要素モアリ」

19 薄雲 「青 マレニ河内本ノ要素アリ」

20 朝顔 「青」

21 少女 (なし)

22 玉蔓 「青 河内本ニ通スル所アリ」

23 初音 「青表紙ナレド河内本ニ通フトコロアリ」

24 胡蝶 「青 河内本ニ通フトコロモアリ」

25 蛩 「青表紙本也」

26 常夏 「青 異同甚タ多し」

27 篝火 「青 河ニ通ズル所多しソノ他青河イヅレモナキ所モアリ」

28 野分 「青 マレニ河内本ノ所アリ」

29 行幸 「青」

30 藤袴 「青」

31 真木柱 「青 河内本ニ通フトコロ有」

32 梅枝 「河内本」

大体河内本系統ノ本文ヲ有スト考ヘラル。

33 藤裏葉 「河内本 少異アリ」

34 若菜上 「河内本歟 少異アリ」

35 若菜下 「青河ノイヅノ要素モアラム別一本歟」

36 柏木 「青、河イヅレニモナキ一本歟」

37 横笛 「不明」 (上記付箋の余白に鉛筆書で) 秀云青表紙本也

38 鈴虫 「少異アレド河内本ニヤ或ハ折合本歟」

少異アレド、大体河内本系統ノ本文ト考ヘラル。中ニ、青表紙本系統ノ本文交レリ。

39 夕霧 「河内本ノ一本カ、或ハ河内以前ノ一本ナルカ」

40 御法 「河内本歟異南少カラズ又十本カ」(棒線は鉛筆書)

(右付箋の余白に鉛筆書で)「青ナリ一個所大異同アリ(衍文アリ)」

41 幻 「青河イヅレニテモナキ一本歟 不明」

42 匂宮 「青河共通 他ノ一本ナルヘシ」

青、河、何レニモ通フ所アルモ、比較的、青表紙系統本ニ接近セル本文ヲ有スモノト考ヘラル。

43 紅梅 「河内本 多少ノ異同マヌカレズ」

44 竹河 「不明」

45 橋姫 「青河イヅレニモナキ一本」

(薄茶刷原稿用紙の裏を使用した別紙付箋)
「肖柏本 青表紙本トミトム」(鉛筆書)

46 椎本 「青河以外ノ一本歟、又ハ折合本カ」

47 総角 「青河イヅレニテモナキ一本」

48 早蕨 「青河イヅレニモツカヌ一本歟」

49 宿木 「青河イヅレニモ通フ別ノ一本歟」

青、河、何レニモ通フ所アルモ、大ナル校異ニ至ツテハ、比較的、青表紙本系統ノ本文ニ近似セリ。且、マ、

コノ本独特ノ本文ヲ有セリ。

50 東屋 「青河イヅレニモ通フ一本也」

青、河、何レノ本文ニモ通フ所アルモ、尚、比較的の多く、青表紙本系統ノ本文ヲ含ムモノト考ヘラル。マ、

両系統ノ何レニモナキ本文ヲ有ス。

51 浮舟 「青、河イヅレニモ通フ一本也」

青、河何レノ本文ニモ通フ所アルモ、尚、比較的多く、青表紙本系統ノ本文ヲ含メルモノト考ヘラル。マ、

特殊ノ本文ヲ有ス。

52 蜻蛉 「青河以前ノ一本也 河ニ近し」

53 手習 「河内本ノ一本カ 宮本ト少異アリ 為氏本トホトンド同じ」

54 夢浮橋 「河内本ノ一本ナリ、少異アリ 青ニ通フ」

（同巻の巻末遊紙第一丁に付箋一枚、45橋姫巻、肖柏本 青表紙本トミトムと同じ薄茶刷原稿用紙の裏を使用）

「肖柏本 青表紙本トミトム」

「肖柏本 青表紙本也／校合の、ち付箋ヲカヘルコト」

これらの付箋を見ると、池田氏は肖柏本全巻について一卷一卷の本文を詳細に検討されたこと、同時に、その判断には苦慮されていることがうかがえる。また、夢浮橋巻後遊紙の付箋記事「肖柏本 青表紙本也／校合の、ち付箋ヲカヘルコト」からは、池田氏が最終的には肖柏本を青表紙本と認定したこと、また自らの調査後、更に精密な本文「校合」を依頼して、その「校合」調査によって自分の付箋を変えること、を指示したことが知られる。しかし実際には、ほぼ全巻に池田氏の付箋はそのまま残されている。右の一覧中□で囲った端正な黒ペン書の付箋がその「校合」調査によるものであるが、池田氏付箋の上に上方数ミリのみの糊付で重ねて添付されており、下の池田氏付箋の記事は明瞭である（横笛の鉛筆書のみは、池田氏付箋の余白に書き込まれている）。

こうした本文調査の後、結局、肖柏本五十四巻の内、帚木・花散里・野分・東屋の四巻を除く五十巻はすべて青表紙本として『大成』に収録されたわけである。

『大成』に収録されなかった四巻、この内の帚木巻には付箋がないが、残り三巻の池田氏の記事は次のものである。

11花散里 「河内本 少異アリ」

「大体 河内本なり」(鉛筆書)

本帖の本文は、大体に於て湖月抄の本文に一致して居ります。

28野分 「青 マレニ河内本ノ所アリ」

50東屋 「青河イヅレニモ通フ一本也」

青、河、何レノ本文ニモ通フ所アルモ、尚、比較的多く、青表紙本系統ノ本文ヲ含ムモノト考ヘラル。マ、

両系統ノ何レニモナキ本文ヲ有ス。

11花散里の記事は、池田氏朱筆並びに斎藤秀雄氏かと思われる黒ペン書共に、15蓬生巻のものとはほぼ一致。他にも、多少の意味合いの相違はあるが河内本かとの記事を持つ巻はいくつもある(33藤裏葉・34若菜上・43紅梅・53手習、54夢浮橋巻)。また、28野分巻とはほぼ同じ記事内容を持つ巻(18松風・19薄雲・22玉蔓・23初音・24胡蝶…)も甚だ多い。50東屋巻の記事は51浮舟巻とほぼ同じであり、他巻にも同様の記事がいくつも見受けられる。

このように、多くの巻が本文について似通った記事を持つ中で、特にこの四巻が『大成』不収録となったのは何故なのだろうか。

池田氏は『大成』校異篇への収録にあたって、多くの巻を有する源氏物語伝本については、しばしば伝本中の各巻を取捨選択して採録されている。一つの伝本において同時期の書写であるにもかかわらず、また本文系統の相違が明瞭でないにもかかわらず、省かれている場合がある。それは飯島本、麦生本、阿里莫本等の、いわゆる別本に分類される伝本においては特に顕著で、その場合、氏の別本認定基準から一つの傾向・基準といったものが見いだせることは以前に述べた¹⁶。しかし、本肖柏本の場合には、その基準はどのようなものであったのだろうか。池田氏の付箋記事を見る限りでは、その判断は必ずしも明瞭なものではなかったように思われる。本稿では各巻の本文には及ぶことができず、この問題については保留となる

が、池田氏の『大成』収録にあたっての取捨選択の理由は考えておかなければならない問題であろう。

おわりに

源氏物語肖柏本は、全五十四卷中五十卷がいわゆる青表紙本として『大成』に採録されている室町期の写本。筆者は牡丹花肖柏とされており、本文は青表紙本の中でも三条西家本に近い。『大成』以来、本肖柏本についての大方の評価はこのようなもので、その後、伝本全体としてのまとまった調査は行われてこなかったようである。

本稿ではこの肖柏本について、その書誌的概要を述べ、そこから、本書がはたして牡丹花肖柏筆であるのかどうかを含めて、書写者の輪郭、及びその周辺を考察した。以下に、その主な点についてまとめておく。

本書の筆致からは、書写者はおそらく牡丹花肖柏本人ではないだろうこと。その中で、三条西家本（日大本）花宴巻奥書中の「肖柏筆」は肖柏筆源氏物語につながる情報ではないこと、また、日大本花宴巻と肖柏本花宴巻の本文には、直接の書承関係は認められないことを述べた。

では、本書の書写者についてであるが、本書の様々な書誌的状況——全紙を精一杯に使用した紙面、四周の余白がごくわずかな本文墨付等からは、当時高価な鳥の子紙を余さず用いていることが実感された。加えて、前後の白丁（遊紙）の在り方も、綴葉装の源氏物語においては異例と言ってよいほどに、切り取りなしに白丁（特に巻末）枚数が見事に最少に一定していた。この紙数の準備状況からは、紙の無駄が最小限に抑えられていることと同時に、肖柏本の制作者が、源氏物語の各巻本文の分量を熟知していることがうかがわれる。

また、その書写は五十四巻という大部な巻を通じてむらがなく、文字の大きさ、一行字数、その筆致共に、実に一定している。これは源氏物語という長大な作品の書写によく慣れている書写者であることを物語る。また、本書全巻に施された種々の注記や書入、引歌等の記された添付紙箋はほほすべて本文と同筆であった。このことは本書が、源氏物語を読み、解釈し、学ぶ為に、その当人が自ら書写した源氏物語写本である、ということであろう。

そして文字・筆致は、牡丹花肖柏を彷彿とさせる連歌師流のものである。また、肖柏本の本文は、定家本では三条西家本（日大本）・三条西家本（宮内庁書陵部本）の本文と比較的近いことが旧来、指摘されている。

こうしたことから集約されてくることは、本書の書写者は、源氏物語の書写によく慣れた、自らも源氏を読み、学び、解釈し、音読する必要があった者、連歌師流の文字を書き、肖柏や実隆周辺にあって、同じような本文を享受している者である。こうした人物が、自ら使用するために自身で全巻を書写した、その源氏物語写本が本書である、ことを述べた。

また、最後に、本肖柏本に残されている各巻本文についての池田亀鑑氏のコメントを記した。肖柏本各巻本文についての池田氏の見解、苦慮の様がうかがえると同時に、『大成』における各種伝本の本文系統の判断、及び、校異篇採録にあたっての取捨選択は、実際、どのような基準によるものだろうか、との思いを深くする。

注

- (1) 池田亀鑑『源氏物語大成』昭和三十一年 中央公論社
- (2) 大津有一「諸本解題」(池田亀鑑編『源氏物語事典』昭和三十五年 東京堂)
- (3) 写本の書写を行う時、行数及び一行字数も親本通りに写すことがある。その場合、墨付丁数も親本と同じになるため、紙数の予測は難しいことではない。ただし、その場合でも、五十四巻の各巻巻末白丁をほぼ一丁とするためには各折(各括り)紙数の綿密な計算が必要である。
- (4) 池田亀鑑氏と前田善子氏の源氏物語諸本蒐集については、永井和子・伊藤鉄也対談「前田善子の紅梅文庫と池田亀鑑の桃園文庫」(伊藤鉄也編『もつと知りたい池田亀鑑と「源氏物語」第2集』平成二十五年 新典社)に詳細である。
- (5) 東京帝国大学文学部国文学研究室編『源氏物語に関する展覧書目録』昭和七年。本展覧会目録については、田坂憲二「校異源

- 氏物語」成立前後のこと」(伊藤欽也編『もつと知りたい池田亀鑑と「源氏物語」第1集』平成二十三年 新典社)に詳細である。
- (6) 芳賀博士記念会編『校異源氏物語』昭和十七年 中央公論社
- (7) 天理図書館編『稀書目録 和漢書之部 第三』昭和三十五年
- (8) 小松重美編『日本書蹟大鑑』第九卷(昭和五十三年 講談社)に所収の肖柏消息、和歌懷紙三点、短冊等。また、天理図書館所蔵『賦何船連歌百韻』(巻末に「肖柏」と自署)等。
- (9) 『実隆公記』享祿二年十月五日記事「自能州源氏本被借送之、夢庵所持之古本也、先日余所望也」
- (10) 岸上慎二「三条西家証本 解題」(影印叢書『日本大学蔵 源氏物語』第一巻 平成六年 八木書店)
- (11) 注(10) 参照。
- (12) 岡野道夫「証本源氏物語の本文について―日本大学図書館蔵本と宮内庁書陵部蔵本の性格―」(『語文』第二十一輯 昭和四十年六月 日本大学国文学会)、同「吉川本源氏物語帯木巻の本文について」(『研究紀要』第十六号 昭和四十九年三月 日本大学人文学研究所)
- (13) 伊井春樹「源氏物語の世界への招待」(国文学研究資料館編『源氏物語千年のかがやき 立川移転記念特別展示図録』平成二十年 思文閣)
- (14) 『醒睡笑』巻五「妣心」中の記事
和泉の境に宗椿とて手書のありし 源氏を写す事廿三部 廿四部めの朝顔の巻にて空しくなりぬ 牡丹花かれか心の程をあはれみて追善のため
筆にそみこころにかけし契りにや折しもきえし朝顔の露
- (15) 当時の記録類には、他の紙類とは異なって鳥の子紙だけは一枚単位でその値が書かれている。値が各段に高いためである。岡寫偉久子「室町後期、源氏物語写本の値」(紫式部学会編『むらさき』第五一輯 平成二十六年十二月)
- (16) 岡寫偉久子「『大成』の別本採否のあり様―阿里莫本の場合から―」(『源氏物語写本の書誌学的研究』平成二十二年 おうふう)。
また、池田和臣氏は飯島本の『大成』採否について言及されている(『春敬記念書道文庫蔵 源氏物語 解題』(『飯島本源氏物語』第一巻 平成二十年 笠間書院))

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32
東屋	宿木	早蕨	総角	椎本	橋姫	竹河	紅梅	匂宮	幻	御法	夕霧	鈴虫	横笛	柏木	若菜下	若菜上	藤裏葉	梅枝
あつま屋	やとり木	さわらひ	あけまき	椎かもと	はし姫	たけ川	こうはい	匂ふ兵部卿	まほろし	御のり	夕きり	すゝむし	よこ笛	かしは木	わか菜下	わか菜上	藤のうら葉	みゆき(貼り誤り)
3	5	2	5	3	3	3	2	2	2	2	4	2	2	3	6	6	2	2
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
74	99	21	98	41	44	46	15	16	25	22	77	16	21	44	110	116	28	21
3	2	0	3	2	1	1	2	3	0	1	2	1	0	1	1	1	1	2
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
							1	1				1	1		1	2		
×																		

54	53	52	51	巻序	
夢浮橋	手習	蜻蛉	浮舟	巻名	
夢のうき橋	手ならひ	かけろふ	うき舟	題簽	
2	4	3	4	折数	形態
1	1	1	1	前白丁数	
20	76	63	77	本文丁数	
1	1	2	2	後白丁数	
○	○	○	○	注記	行間書入
○	○	○	○	濁点	
				句読朱点	
				朱合点	
	2			紙箋	
				『大成』採否	